

死神サークル III

サンタクロース

春日信彦



—

目次

死神サークルⅢ	1
---------	---

死神サークルⅢ

1

連続失踪

12月3日（木）長崎県警より、福岡県警に対馬北署の佐藤警部が失踪したとの報告があった。12月1日（火）、佐藤警部が無断欠勤のため、署より電話にて連絡を試みたが通話不能だった。全く、失踪原因がつかめず、連日、対馬市内を捜索中であった。また、元部下であった安倍警部補は、体調不良を理由に10月末をもって退職していた。本部長より捜索支援を命ぜられた伊達は、12月7日（月）より、対馬北署に向かうこととなった。

12月5日（土）沢富は今後の菅原洋次捜索についての打ち合わせを行うために、伊達のマンションにやってきた。伊達と沢富は、瑞恵と美津子の会話が録音されたボイスレコーダーから、「正義への復讐」という菅原洋次の謎めいた思惑を知った。そのことから、今回の佐藤警部失踪と菅原洋次失踪には、何らかのつながりがあるのではないかと二人は疑っていた。キッチンテーブルの椅子にどっしりと腰を据え、腕踏みをした伊達は、つぶやいた。「佐藤警部の失踪、いったいどういうことだ。安倍警部補は、10月末に、退職してるし。対馬北署は、呪われてるんじゃないか？」

沢富が、うなずき返事した。「菅原洋次の失踪と関係ありますか？まさか、何らかのうらみがあって、菅原洋次が佐藤警部を暗殺したってことはないでしょうね？ちょっと考えすぎですかね。ところで、安倍警部補は、すでに退職されてるそうですが、これも、何か引っかけられますね」伊達は、大きくうなずいた。「確かに。安倍警部補は、何も知らないということだが、それは、怪しい。須賀巡查長は、どうなんだ？」沢富が、首をかき上げて返事した。「やはり、安倍警部補は、においますよ。きっと、何か隠してると思います」伊達は、う〜とうなずいた。「確かに、何も知らないってことはないだろう。でもな〜、話になるかどうか？」

沢富が、質問しようとした時、ナオ子が、ミルクライボスティーとリンゴを運んできた。「あなた、気味が悪いですね。警部が失踪するなんて、前代未聞じゃない。誰かに殺されて、海底に沈んでるとか?いや、山の中に埋められているとか?」伊達は、目を丸くして身を引いた。「おいおい、物騒なこと言うなよ。まあ、誰かに拉致されたと考えれなくもないが。警部に恨みを持つものは、一人や二人は、いるだろうからな〜」ナオ子がお茶を勧めた。「冷めないうちにどうぞ。ライボスティーは、血圧降下作用があって、体にいいのよ。もう、そろそろ、健康のことを考えてもらわないと。私をおいて、脳溢血で、コロッとあの世に行かないでくださいね」

苦虫をつぶしたような顔の伊達が、返事した。「まったく、縁起でもないことを言うんじゃない。俺を殺す気か?わかってるけど、やめられないのが、たばこなんだ。俺も、つくづく嫌になる。まさに、たばこは、麻薬だな。少しでも、お酒を減らして、健康茶を飲むことにするか。できることと言えば、このくらいだ。なさけないな〜俺も」沢富が、助言した。「お酒より、たばこですよ。本数を減らさないと、血圧は下がりませんよ。冗談抜きで、命にかかわります。気持ちを入れ替えて、頑張ってみてください。そう、電子パイポを使ってみてはどうですか?たばこの味がするそうですよ」一瞬、伊達は、沢富を睨みつけたが、眉を八の字にして返事した。「お前に、同情されるようじゃ、俺も先が短いな。わかった。一度、試してみるとするか」

沢富が、目をむき出して伊達に質問した。「さっき、話になるかどうか、って言われましたよね。それって、どういう意味ですか。体調が悪いとは、聞いていますが、面会できないほどの病気なんですか?」伊達が、首をかしげて返事した。「それがだな〜、病気というのが、頭のほうだ。早く言えば、頭が変になったということだ。今、精神病で入院してるそうだ。まったく、訳が分からん」沢富とナオ子は、顔を見合わせた。沢富が、

甲高い声で応答した。「頭が狂った。いったい、どういうことですか?アルツハイマーにでも、なったんですか?」伊達が、口をひん曲げて返事した。「統合失調症とか言ってたな。聞くところによると、発狂したらしい。俺は殺される。俺は狙われてる。助けてくれ。こんなことを叫んでるそうだ」

3

沢富は、即座に返答した。「それじゃ、佐藤警部の失踪とかかわりがあるということじゃないですか?もしかしたら、佐藤警部と安倍警部補に恨みを持つものから、殺人予告の手紙が、送られていたんじゃないでしょうか?だから、安倍警部補は、殺される、と叫んでいるんじゃないですか?もし、そうだとしたら、佐藤警部は、拉致されているか、すでに、殺されているかもしれません。大変なことになりましたね」伊達が、即座に応答した。「おい、おい、そう、決めつけるんじゃない。まだ、はっきりしたことは、わかっていない。とにかく、安倍警部補に面会したいんだが、果たして、主治医の面談許可が下りるかどうか?」ナオ子が、口をはさんだ。「あなた、やめてください。頭が、変なんですよ。面会中に、殴られでもしたら、どうするんですか」

伊達が、うなずき返事した。「確かに、狂人は、何をしでかすかわからん。ま〜、どの程度なのかは、主治医に聞いてみんとな。今のところ、安倍警部補に面談する以外、失踪の手掛かりがつかめないような気がする。とにかく、N病院に行ってみることにする」沢富が、不安げな表情でつぶやいた。「佐藤警部、いったい、どこに消えたんでしょう。無事だといいですね」ナオ子が、腕時計を覗いた。「もう、こんな時間。ひろ子さんと瑞恵さんがやってくる時間。今日は、すき焼きよ。佐賀牛を奮発しちゃった。来週から、対馬でしょ。くれぐれも、コロナにかからないようにね」伊達が苦笑いした。「そうだな。三密を避けて、用心するさ。でも、それにしても、11月に入ってから、急激に感染者が増加したな〜」

大きくうなずいた沢富が応答した。「感染者の増加なんですけど、感染者は、日本人じゃないんです。ほとんどが、中国人なんです。11月だけで、約2万人、入国してるという

じゃないですか。政府は、何を考えてるんですかね。中国人のための病院になってるですよ。医療崩壊が起きてるというのに、全く、けしからんです」ナオ子が、目を丸くして応答した。「え、そうなの。中国人が日本に入ってきてるの。いったい、どういうこと。GO TO キャンペーン、で中国人を入国させてるってこと。日本政府が、中国の出先機関になってしまったの。ばっかじゃないの。日本政府のやることじゃないわよ。この調子で、感染者の増加が続けば、私たちも PCR 検査受けさせられて、偽陽性に、させられるんじゃない。あ～～、いやだ、いやだ」

4

5時を回ったころ、ひろ子と瑞恵がやってきた。二人がテーブルに着くとナオ子は、ミルクイボスティーを運んできた。「今日は、健康茶を飲んでね。コロナにかかったら、大変じゃない。そう、瑞恵さん、お店はどう?コロナ対策してるの?」瑞恵が、即座に応答した。「はい。しっかりやっています。でも、11月に入って、また、お客が減りました。東京、大阪方面からのお客が激減してるんです。今は、地元の常連さんだけです。こんなんじゃ、倒産するかも、って、ママが、へこんでます。本当に、どうなるんでしょう」ナオ子が、心配そうに返事した。「水商売は、大変ね。コロナ禍で、飲食業、レジャー業界、は大打撃でしょ。航空会社は、赤字続きで、倒産するかもしれないそうよ。いったい、日本はどうなるの?」

沢富が、大統領選挙のことについて話し始めた。「確かに、このまま中国マフィアの戦略にはまってしまうと、アメリカも、ヨーロッパも、日本も、台湾も、彼らの植民地になってしまいます。コロナパンデミックも、中国マフィアのウイルス兵器を使ったアメリカ大統領選挙攻撃です。今のところ、不正選挙であったとしても、選挙の結果では、バイデンが次期大統領になるでしょう。そうなれば、ますます、中国マフィアの勢力は、拡大します。最悪の場合、対抗措置として、トランプが、中国の軍事基地を攻撃するかもしれませんが、日本も戦争に加担せざるを得ないでしょう。日本の立場としては、トランプの再選が好ましいのですが、どうなることか?」

政治の話に疎い瑞恵が質問した。「政治のことは、よくわからないのですが、バイデン

が大統領になったら、日本政府は、中国人を大量に入国させるんですか?それと、今年、中国は、大洪水で農地があれで、穀物の収穫ができなかったと聞いています。来年、中国が食糧危機に陥ったら、日本の食糧を提供することになるんですか?そうなれば、日本のお米、パン、などの食料品の値段が上がるんでしょうね。貧乏人は、いつも、イジメられますね。警察官の給料だけじゃ、やっていけませんよ。どうしよう」沢富が応答した。「瑞恵さんのおっしゃる通りです。間違いなく、来年、中国は、食糧危機に陥ります。そして、日本の食品物価は、急上昇します。さらに、コロナパンデミックが続けば、中小企業の倒産が、急増します。これらは、日本だけにとどまりません。世界大恐慌です」

5

ナオ子は、甲高い声で叫んだ。「ヒャ～～、どうなるのよ、私たち。まさか、警察官も、リストラってことはないわよね。あなたがクビになったら、どうなるの。転職するといっても、あなたができることと言えば、警備員ぐらいでしょ。私は、清掃員ぐらいかしら。ア～～日本は、地獄ね。サワちゃん、どうにかならないの」伊達が、怒鳴り声で応答した。「おい、俺をクビにする気か?俺はだな～、警察官に命を懸けてるんだ。命を懸けて、日本を守るつもりなんだ。そう、簡単に、クビにさせられて、たまるもんか。トランプ再選のためなら、戦争に行ってやろうじゃないか。ヤマト魂を見せてやる。中国なんかに、占領されて、たまるもんか」

沢富が、笑い声をあげた。「そう、興奮しないで。まだ、開戦したわけじゃないんです。ただ、米軍、NATO 軍は、中国軍事基地を攻撃する準備はしてるそうです。日本には、軍隊はありませんが、米日軍として、自衛隊が参加するでしょう。我々も、いつでも、出兵できるよう、心構えは必要です。日本のために、戦いましょう」ナオ子が、大きくうなずき応答した。「その意気よ。あなた、日本のため、日本女性のため、戦うのよ。中国に占領されないために、戦ってくれたと思えば、たとえ、あなたが戦死しても、耐えられるわ。さすが、あなた、見直したわ」伊達は、戦死と聞いて、大きく身を引いた。「おい、俺は、戦争に行くと言ったが、戦死するとは言ってない。そう、簡単に殺すなよ。意外と、冷たいんだな」

顔が青ざめた瑞恵が、応答した。「それじゃ、世界第3次世界大戦ですか?大野さんは、若いから、きっと、赤紙が来るでしょうね。どうしよう、戦死したら。すぐに未亡人になるのね」ひろ子が、勇気づけた。「心配ないわよ。まずは、自衛隊が戦ってくれるから、すぐには、赤紙は、来ないわよ。たとえ、戦死しても、日本のためじゃない。女性は、じっと絶えないと。でも、もし、中国に負けたら、残された女性は、中国人と再婚することになるわね。チベット人女性、ウイグル人女性は、中国人と結婚させられているでしょ。でも、弱気になっちゃダメ。米日軍と NATO 軍の連合軍だもの、中国軍には、決して負けないわよ。いざとなれば、女性軍を作って、戦いましょう。瑞恵さん」

6

伊達と沢富は、顔を見合わせて、目じりを下げた。沢富が、応答した。「そう、心配しないでください。連合軍は、中国軍なんかには、負けませんから。きっと、日本を守って見せます。安心してください」うなずいたナオ子が、腕時計を覗いた。「6時過ぎちゃったわ。夕飯の準備しなくっちゃ」即座に、ひろ子が、応答した。「手伝います」瑞恵も続いて応答した。「私も、手伝います」ナオ子が返事した。「それじゃ、手伝ってもらおうかしら」三人の女性たちは、夕飯の準備に取り掛かった。

取り残された伊達と沢富は、佐藤警部失踪の話に戻した。腕組みをした伊達が、話し始めた。「うるさいのが、消えてくれて、気が落ち着くな。ところで、佐藤警部失踪の件だが、拉致されているような気がするのだが、どう思う?」沢富は、ふと思い出したように返事した。「例の、対馬には似つかわしくない超豪華な別荘が怪しいですね」伊達も思い出したように返事した。「あの別荘か。ありえるな～。IT社長の別荘らしいが、確かに、怪しい。もし、中国マフィアの別荘だったら、可能性はある。でもな～。あそこに侵入するのは、命がけだ。見つければ、消される。やはり、安倍警部補から情報を取る以外ないだろう。何か、知ってるはずだ」

沢富も同意見だった。「そうですね。それじゃ、月曜日に、病院に行かれますか?」伊達

が、大きくうなずいた。「その予定だ。とにかく、安倍警部補と面談できるように、主治医を説得してみる。万が一、佐藤警部と安倍警部補が、中国マフィアの麻薬密輸にかかわっていたとすれば、二人は、消される可能性がある。安倍警部補は、そのことを察知して、怯えているのかもしれない。ここでどんな憶測をしても佐藤警部の発見の糸口はつかめん。とにかく、月曜日には、N病院に行ってみる」沢富は、うなずいて応答した。「そちらの件は、お任せします。私は、菅原洋次の捜索を続けます。瑞恵さんのボイスレコーダーは、とても参考になりました。美津子から、さらに情報が取れ次第、報告します」

7

発狂

11月7日(月)長崎市にあるN病院に午後1時30分少し過ぎに到着した。主治医との約束時間は、2時のため、満席の待合室で時間をつぶすことにした。電話では、面会は難しいといわれたが、とにかく主治医を説得して面会することにした。ぼんやりしているといろんな考えが浮かんできた。安倍警部補は、警察との面会を嫌っているようだが、何かにおびえていることから、誰かに恫喝されているのではなかろうか?警察官が、恨みを買うのは、日常茶飯事だ。でも、殺されると叫ぶほどの恫喝を受けているとなれば、恫喝者の目星がつくのではなかろうか。例えば、かつてヤクザを逮捕したとか、逮捕された者が有罪になったが、冤罪を訴える親族がいたとか、そうことであれば、過去の事件を調べれば問題解決の糸口はつかめる。

だが、全く警察に助けを求めないということは、警察には言えないような何らかの事情があると考えていい。そう考えれば、佐藤警部と安倍警部補は、何らかの不法行為を行っていたと考えていい。となれば、収賄あるいは、密輸にかかわっていたと考えられないか? 仮に、サワが言うように殺人予告がなされていたとなれば、恨みからということになる。賄賂、密輸で恨みを買うだろうか? どうも結びつかない。麻薬密輸にかかわって

いたと仮定しても、マフィアは殺人予告はしないだろう。口封じをするのであれば、速やかに事故死に見せかけて暗殺するに違いない。いったい、どんな恨みを買って、殺人予告がなされたのか？

あまり考えたくないが、菅原洋次の恨みを買っているのか？では、いったいどんな恨みを買っているのか？でも、菅原洋次が、何らかの理由で佐藤警部と安倍警部補の二人を恨んでいたとしても、二人をマジで殺害するだろうか？それとも、殺害予告をして、精神的に苦しめるのが目的なのか？仮に、菅原洋次に佐藤警部が拉致されて、どこかに軟禁されているとしよう。目的は何か？取賄、密輸についての自白の強要か？自白させることができたならば、警察の悪事を世にしらしめるために、それをユーチューブにアップする気なのか？ちょっと考えすぎか？たとえ、佐藤警部と安倍警部補が、麻薬密輸にかかわっていたとしても、菅原洋次が二人に恨みを持つとは考えづらい？

8

仮に、菅原洋次が、麻薬取引の現金を持ち逃げしたとしたならば、余計な事件を起こすとは考えにくい。大金を手に入れたのならば、そっと身を隠して、ぜいたくな暮らしをした方が得策じゃないのか？俺だったら、そうする。やはり、菅原洋次と二人は無関係なのか？頭がこんがらがってきたぞ。まとめてみよう。まず、マフィアの線を考えてみる。佐藤警部と安倍警部補の二人は、警察に知られたくない不法行為を行った。また、その不法行為は、マフィアとかかわっていた。そのため、”口封じのためにマフィアに暗殺される”、と二人は思っている。

菅原洋次の恫喝の線で考えてみる。菅原洋次が、二人を恫喝したとするならば、恫喝する根拠は何か？菅原洋次が、麻薬の運び屋だったとする。また、佐藤警部と安倍警部補も麻薬密輸にかかわっていたとする。そう考えれば、三人は、麻薬密輸の線につながる。普通に考えれば、三人は、マフィアに利用されていたわけだから、菅原洋次は二人と同じ立場になる。菅原洋次が二人を憎む理由が思いつかない。では、菅原洋次が二人を憎む理由があるとするならば、いったい、どんなことか？一言考えられることは、出口巡

査長の死との関係だ。もし、出口巡査長も麻薬密輸にかかわっていたとしよう。そうであれば、4人が、麻薬密輸にかかわっていたことになる。

現在、死亡しているのは、出口巡査長だけだ。出口巡査長の死が、今回の失踪と恫喝に関係があるとすれば、菅原洋次と出口巡査長に、何らかのつながりがあると考えられる。二人に共通する事項として、二人とも、出身が対馬ということだ。ということは、菅原洋次と出口巡査長は、親友だったのか?年齢差と職業を考えると、親友になるきっかけはどんなことだったのか?あ、そうか、二人とも、クリスチャン。もし、出口巡査長が、佐藤警部と安倍警部補に殺されたのであれば、菅原洋次が親友の仇を取ると考えられる。でもな～、佐藤警部と安倍警部補が、出口巡査長を殺すだろうか?そうか、直接殺したのではなく、出口巡査長が仲間を裏切ろうとしてるとマフィアにチクったと考えて見てはどうか?

9

出口巡査長の死因が、佐藤警部と安倍警部補の二人によるものだとしても、いったい、なぜ、菅原洋次がそう考えたのか?そうだ、出口巡査長は、彼の事故死の前に、麻薬密輸に関する悩みを菅原洋次に話したのではないか?それで、菅原洋次は、出口巡査長、佐藤警部、安倍警部補の三人が、麻薬密輸にかかわっていることを知ったのではないか?であれば、出口巡査長の死は、単なる事故死ではなく、佐藤警部と安倍警部補によるものだと菅原洋次が思い込んでも筋が通る。でもな～、単なる妄想かもな。今、はっきりしていることは、菅原洋次と佐藤警部の失踪。安倍警部補の恐怖からの発狂。

ふと、伊達は、腕時計を覗いた。1時55分を確認した伊達は、総合受付カウンターに向かった。伊達は、受付嬢に声をかけた。「2時に、北里先生とお約束している伊達と申します。どちらに伺えばよろしいでしょうか?」受付嬢は、質問した。「精神科の北里先生ですね。ご家族の方でいらっしゃいますか?」伊達は、小さな声で返事した。「いいえ、

警察のものです」受付嬢は、一瞬顔を引きたらせた。「しばらくお待ちください」受付嬢は、確認を取った。「では、3階の東病棟受付までお越しください。右手のエレベーターを使われて、降りられたら、右側にございます。伊達は、エレベーターに向かった。

3階の受付で予約を申し出ると男性の看護師に案内された。看護師が医師室のドアをノックして声をかけた。「先ほど連絡いたしましたお客様です」中からだみ声が響いた。「どうぞ」看護師は、ドアを開き伊達を招き入れた。そして、看護師は、身を隠すように素早く立ち去った。北里医師が、固まった顔で突っ立っている伊達に声をかけた。「どうぞ。おかけください」医師は、中央のソファーに手招きした。伊達は、ロボットのような動きで静かに腰掛けた。伊達は、病院が嫌いで、威圧感を持った医者と話をするのが苦手だった。伊達が腰掛けると北里医師も左斜めに腰掛けた。伊達は、早速、お願いした。「30分ほどでよろしいので、面会させては、いただけませんか?詳しい事情は申し上げられませんが、警察内部の事件がかかっていますので、お願いいたします」

10

北里医師は、なにか考えているような表情でしばらく黙っていたが、低い声で返事した。「電話でも申しましたように、彼は、何かに怯えて、発狂しています。被害妄想を伴った統合失調症と言えます。今のところ、凶暴性は見られませんが、突然、暴力行為を起こさないとも限りません。それでも、面会なされたいのですか?」伊達は、覚悟を決めていた。「承知しております。何らの事故が起きても、一切の責任は自分にあります。先生には、決して、ご迷惑をおかけすることはございません。どうか、お願いいたします」医師は、うなずいた。「警察の方の依頼ということで、特別に、許可いたしましょう。何か、危険を感じたならば、即座に逃げてください。それと、こちらの緊急通報機をお持ちください。この赤いボタンを押せば、廊下に待機している看護師が、即座に、救出に伺います」

医師は、男性看護師を呼び出し、安倍警部補の病室に案内させた。看護師は、病室に入ると患者に面会のことを伝えて出てきた。「今のところ、問題はなさそうです。くれぐれも、言葉遣いには、ご注意ください。では、どうぞ」看護師は、ドアを開き伊達を招き入れた。看護師は、廊下に出ると入り口横の椅子に腰掛け待機した。伊達は、安倍警部補が突然襲いかかて来るのではないかと内心おびえていた。病室には、腰掛ける椅子もなく、ベッド以外何も置かれていなかった。伊達の目の前には、目を閉じて静かに寝ている安倍警部補の顔があった。安倍警部補は、目を開くと小さな声で伊達に声をかけた。「何か？」伊達は、優しい声で質問した。「ちょっとだけ、聞いてもいいか？」

安倍警部補は、小さくうなずいた。「あ～～、今も、殺人電磁波で、俺の脳細胞は、破壊され続けている。そして、いずれ、きっと、宇宙人が、とどめを刺しにやってくる。だれも、俺を助けてくれない。俺を助けに来てくれたのか？」

訳の分からない返事に困惑したが、質問を始めた。「今月に入って、佐藤警部が、失踪した。何か心当たりはないか？」安倍警部補は、目を閉じて返事した。「佐藤警部、聞いたことがあるな～。前世の話か？前世は、俺も警察官だったのかも。でも、前世のことは、何もわからん」伊達は、質問を続けた。「そうか。安倍警部補は、なぜ、宇宙人に狙われているんだ？心当たりはないのか？」安倍警部補は、震えだした。「なぜだ？俺は、何も悪くない。宇宙人は、悪魔だ。俺は、何も悪くない。あんたまで、俺を、悪者扱いするのか？」

11

あまりにも意味不明の返事を聞いて、本当に発狂しているように思えたが、敢えて発狂しているふりをしているとも考えられた。万が一、不法行為をしていたとしても、安易に、そのことを口にするとは考えられない。どういう質問をすべきか悩んだが、元部下である出口巡査長のことを聞いてみることにした。反応から精神異常の程度がわかるような気がした。「自殺した元部下だった出口巡査長のことを憶えているか？イジメがあったんじゃないかと妹が言っていた。そういうことはなかっただろうか？」安倍警部補は、全く、表情を変えなかった。「出口巡査長、聞いたことがない。俺の元部下。これ以上、前世のことを聞いても無駄だ」

これといった情報が得られず時間が過ぎ去ることに焦りを感じた。やはり、本当に頭が変になったのか?敢えて、質問をはぐらかしているのか?これ以上の質問は、無駄だのように思えたが、例の別荘についての作り話をすることにした。「対馬では、ちょっと有名なIT社長の別荘が、火事になったらしい。放火じゃないかという噂だ。今、警察が調べている。俺も、今から、現場に行く予定だ」安倍警部補の表情に変化が見られた。ということは、例の別荘のことを知っているということだ。やはり、発狂は、身を守るためのカモフラージュに違いない。もう少し話を続けることにした。「現場からの報告によると二人の遺体が発見されたそうだ。一人は女性で、もう一人は、男性とのことだ。まだ、詳しいことはわかっていない。佐藤警部でないことを祈っている」

安倍警部補が、体を震わせ、大きく目を開いた。伊達は、即座に質問した。「何か、気に障ることを言ったかな?ちょっと、独り言を言っただけなんだが。あの豪華な別荘を思い出したのか?」安倍警部補が伊達に顔を向けると睨みつけたが、急に、呆然とした表情で話し始めた。「前世の俺は、火事で死んだのかも知れない。頭の中で大きな炎が燃え上がっている。また、宇宙人に、焼き殺されるのか?だれか、助けてくれ。死にたくない。おい、俺を助けに来たんだろ。宇宙人から、俺を守ってくれるんだな。まさか、お前が、宇宙人か?」突然、安倍警部補が、上体を起こした。伊達は、殴られるのではないかと身を引いた。「わかった。落ち着け。俺は、宇宙人じゃない。お前の味方だ。きっと、守ってやる。落ち着け」安倍警部補は、小さくうなずき、上体を倒した。

12

例の別荘に反応したことから、過去の記憶があることは確かだった。認知症になってはいない。確かに何かにおびえているが、マフィアによる暗殺に対してなのか?宇宙人に殺されるといっていたが、これは、殺人予告があったことを意味しているのではないか?宇宙人についてももう少し話してみることにした。「宇宙人に殺されると言っているが、宇宙人から、殺人予告があったのか?」安倍警部補は、無言で目を閉じたままだった。眠ってしまったのかと思い顔を覗き込んだ時、突然、目を開いた。「あ、また、宇宙からの殺人予告が着た。毎日、殺人予告の電磁波が脳に突き刺さってくる。頭が、割れそうだ。

「いったい、俺が、何をしたっていうんだ。いったい、俺が、どんな悪いことをしたって言うんだ」

伊達は、菅原洋次について聞いてみることにした。「宇宙人の名前は、スガワラというんじゃないか？」安倍警部補は、口をとがらせて返事した。「宇宙人は、化け物だ。名前なんかあるものか。ヤツは、殺人電磁波を俺に浴びせかけ、俺が、もがき苦しんでいるのを見て、楽しんでいるんだ。あ～～、頭が割れそうだ。睡眠薬を飲ませてくれ。気が変になってきた。お前、薬、持っていないのか？よこせ、早く」伊達は、身の危険を感じ、立ち去ることにした。「おい、落ち着け、今、薬をもってきてやる。しばらく待ってろ」伊達は、素早くドアを開け飛び出した。伊達は、入口の横にいた看護師に状況を話した。看護師は、患者の部屋に飛び込んで行った。

安倍警部補からは、これといった情報は入手できなかった。宇宙人というのが、マフィアなのか、菅原洋次なのか、それとも恨みを買っている何者なのか、はっきりしない。言えることは、何者かを恐れているということだ。おそらく、同じように佐藤警部も恐れていたに違いない。彼は、宇宙人と言っていた謎の人物に、拉致されているのか、それとも、すでに殺されているのか。伊達は、北里医師にお礼を言って帰ることにした。伊達は、北里医師の部屋を軽くノックした。中から、返事があった。「どうぞ」伊達は、そっとドアを開け、中に入ると深々とお辞儀をした。即座に、北里医師の安堵の言葉が返ってきた。「何事もなく、よかった」伊達は、直立不動でお礼を述べた。「ありがとうございました。彼の病状がよくなり、退院したならば、もう一度、話をしてみます。誠に、ご迷惑をおかけしました。先生のご厚情に、警察を代表して御礼申し上げます」医師室を出た伊達は、病院前でタクシーを拾うと長崎空港に向かった。

13

20 年前の事件

伊達は、対馬やまねこ空港に定刻の午後 3 時 35 分に到着した。大野巡査が午後 4 時に迎えに来ることになっていたため、2 階売店奥にある軽食コーナーで待つことにした。青ざめた顔の伊達は、ホットコーヒーを購入し、ドスンと椅子に腰掛けると生きて対馬に到着したことを神に感謝した。実は、伊達は飛行機とトンネル恐怖症だった。プロペ

ラ機に乗った時は、気絶しそうなほどおびえてしまった。絶対、墜落しないと何度も心に言い聞かせても、こんな小さなプロペラで空を飛んでることが、奇跡に思えて不安でならなかった。このことは、ナオ子にも打ち明けていなかった。口を滑らしでもしたら、気の強いナオ子に、一生、臆病者とバカにされそうだった。

伊達は、一息つくとこれからの捜査について考えた。菅原洋次は、対馬出身でクリスチャンであること。また、プロ野球選手を夢見ていたこと。これらのことを手掛かりに、菅原洋次について、調査することにした。さらに、佐藤警部、安倍警部補、出口巡査長と菅原洋次は、どのような関係にあったのかを確認したかった。特に、出口巡査長と菅原洋次は、ともにクリスチャンであることが気にかかっていた。もし、クリスチャンの正義が、出口巡査長を自殺に追いやったと考えたならば、菅原洋次の正義が何を決断させるのか、不気味でならなかった。二人に共通することは、クリスチャン以外に野球が共通している。もしかすると、野球部の先輩後輩の関係にあったということが考えられる。

伊達は、出口巡査長の出身高校が上対馬高校であったことから、菅原洋次も上対馬高校ではないかと推測した。そこで、大野巡査に菅原洋次の出身高校を調べるように依頼していた。もし、ともに、クリスチャンであり、出身校の先輩後輩の関係があれば、出口巡査長を自殺へ追いやったものへの仇討の可能性は出てくる。そう考えれば、佐藤警部と安倍警部補への仇討ということも考えられなくもない。しかし、菅原洋次が、たとえ、正義感の強いクリスチャンであったとしても、仇討を決行してほしくなかった。出口巡査長の死、佐藤警部の失踪、安倍警部補の発狂、菅原洋次の失踪、これら一連は、麻薬密輸でつながっているような気がしてならなかった。

14

一杯のコーヒーを飲み終えたころ、売店の通路から大野巡査の明るい声が響いてきた。「お待たせしました。思っていたより、混んでたんです」伊達は、笑顔で応答した。「いや、少し、休憩できてよかった」二人は、空港の駐車場に止めていた大野巡査の愛車ソ

リオに向かった。大野巡査は、素早く運転席に乗り込むと、後部座席のスライドドアを開いた。「どうぞ」伊達は、ヒョイと乗り込むとお礼を言った。「悪いな～、迎えまで、してもらって」大野巡査は、笑顔で返事した。「いや、署長の命令ですから。丁重に、お迎えするようにと」伊達は、ちょっと気味が悪かった。「そうか。ところで、菅原洋次の出身高校は、どうだった？」大野巡査は、即座に返事した。「当たってましたよ。上対馬高校です。しかも、野球部でした。僕の大先輩ってことです」

伊達は、大きくうなずいた。「やはり、そうだったか。菅原洋次と出口巡査長は、先輩後輩の関係だったわけだ。ということは、もしかしたら、菅原洋次は、出口巡査長の死に関して、何か知っていると考えられるな」大野巡査は、うなずいた。「私もそう思います。憶測ですが、出口巡査長は、教会で、菅原先輩と偶然出会ったと考えられますか？その時、出口巡査長は、菅原先輩に何か相談したのではないのでしょうか？」伊達は、応答した。「そう思うか。俺もなんだ。出口巡査長は、菅原洋次に何か悩みを打ち明けたんじゃないかと思うんだ。そして、しばらくして、菅原洋次は、出口巡査長の事故死を知った。しかし、出口巡査長の悩みを知っていた菅原洋次は、出口巡査長の死は、単なる事故死ではないと思った」

大野巡査は、大声で返事した。「きっとそうです。そうに違いありません。二人は、クリスチャンです。菅原先輩は、出口巡査長の言葉にできなかった思いを理解できたはずです。もしかしたら、菅原先輩の失踪は、出口巡査長の死と関係あるかもしれませんね」小さくうなずいた伊達は、返事した。「確かに考えられる。だがな～～、そうであってほしくない。仮にだ、菅原洋次が、出口巡査長の仇討のために失踪したとなれば、悪い予感がする」二人を乗せたソリオは、国道382号をのんびりと北上していた。大野巡査は、予定を確認した。「今日の宿泊は、どちらですか？」伊達は、気まずそうに返事した。「いや、まだ、決めてないんだ」大野巡査は、ルームミラーを覗き込み、笑顔で応答した。「それじゃ、僕の実家に泊まってください」

15

伊達は、恐縮したが、民宿に泊まる気持ちで承諾した。「全く、悪いな～～。お言葉

に甘えさせてもらおうよ。実家って、北署の近くなのか？」大野巡査は、笑顔で応答した。「ちょっと離れてますけど、車だとすぐです。比田勝小学校の近くです。そんなこと言ってもわかりませんよね。比田勝港の西側です」伊達は、比田勝港と言われ、大体の見当がついた。「今日は、よろしく頼む」大野巡査は、明るい声で返事した。「今日だけと言わず、何日でもどうぞ。住んでるのは、両親と僕だけですから。気になさらないでください」大野巡査は、路肩に車を止めると、宿泊の件を母親に電話した。

伊達は、ますます恐縮したが、家族について聞いてみることにした。「兄弟は？」ちょっと間をおいて返事した。「は～、2つ下の弟がいます。自衛隊にいます。小さいころから、ガンダムにあこがれてました。変わった子です」自衛隊に入るということは、国防精神がある証だと思ほめることにした。「いや、素晴らしい弟さんじゃないか。今は、どちらの基地に？」大野巡査は、元気がない声で返事した。「航空自衛隊春日基地です。戦死しなければいいんですが」パイロットと聞いて、弟は優秀だと直感した。「いや、日本は、戦争しない国だから、そう、心配せずに」大野巡査は、首を振って返事した。「そうとも言えないんです。来年早々、米軍とNATO軍は、中国軍の軍事基地を総攻撃するらしいんです。そうなれば、自衛隊は米軍を支援することになるはずですよ。兄としては、とても心配なんです」

戦争は、噂だと思っていたが、彼の話を聞くと本当に戦争になるように思えてしまった。伊達は、今は、戦争よりトランプ大統領が再選できるかどうかのほうが心配だった。「確かに、中国人民解放軍は、脅威だ。だからこそ、トランプ大統領に再選してもらわないと、日本は、こてんぱんにやられる。アメリカが中共に支配されたならば、アメリカの民主主義だけでなく、世界の自由と正義が失われてしまう。今回の不正選挙は、決して、許してはならん。全人類、断固として戦わねばならん。そう～思うだろ」大野巡査は、大きくうなずいたが、不安げな表情で返事した。「確かに、そうだと思います。でも、大手メディア、司法、FBI、CIA、州知事、州警察、BLMまでもが中共の手先になっているじゃないですか、今のままでは、バイデンが新大統領になるんじゃないですか？」

伊達は、肩を落としてうなずいた。「今のままでは、トランプ大統領の勝ち目はない。何とかしてほしい」大野巡査は、戦争によって対抗するように思えた。「きっと、戦争をしますよ。これしか、方法がありません。日本国民も正義を守るために、米軍と一緒に、戦いましょう。中国軍基地を徹底的に、叩き潰しましょう」伊達は、力強い声で応答した。「そうだな、ヤマト魂を見せてやるか。悪に支配されるくらいだったら、戦死したほうがまだ。人類の未来のためだ。いつでも、赤紙を送ってくれ。覚悟はできている」大野巡査は、大きな声で同意した。「ヤマト民族の心意気を見せてやろうじゃありませんか。日本の歴史、文化、言語、を守るのは、我々です。よし、戦うぞ」

話がそれて戦争の話になったが、伊達は、菅原洋次についての話に戻すことにした。「ところで、菅原洋次は、お城巡りが趣味ということだ。早速、お城を搜索してみよう」大野巡査が、即座に応答した。「対馬には、意外とお城は多いですよ。上対馬だと、撃方山城（うつかたやまじょう）、内方山城（うちかたやまじょう）、巖原だと、金石城（かねいしじょう）、金田城（かねだじょう）、清水山城（しみずやまじょう）、どこから調べますか？」菅原洋次は、地元の間人だ。ほとんどの城は、巡っているはず。もし、対馬の城を写真にとるとなれば、お城に付随した屋形ではないかと推測した。「そんなにあるのか。厄介だな。お城は、すでに撮っているかもな。今回は、お城というより、歴史的に重要な屋形ではないだろうか？どうも、そっちのほうが気にかかる」大野巡査は、うなずいた。「そうですね。歴史的屋形と言っても、今は、どこも、残っていませんよ。かつてあったというぐらいですね」

伊達は、ちょっと考え込んだ。菅原洋次は、地元だ。ほとんどの旧跡は、写真に撮っているだろう。ならば、もし、対馬にやってくるとすれば、何を目的にやってくるか？菅原洋次の糸口は、クリスチャン、野球、写真、城、そうだ、教会にやってくるかも、それと、母校の上対馬高校、は考えられないか？対馬に関しては、写真と城にこだわってはいけない。まず、ヤツの母校に行ってみよう。偶然出会うかもしれん。「俺も、うかつだった。ヤツは、地元の間人だ。城や屋形の遺構などの写真は、きっと、すでに撮っている。ちょっと気になる場所は、教会と母校だ。明日一番に、ヤツの母校、上対馬高校に行ってみよう。何か、情報が得られるかもしれん」大野巡査は、同意の返事をした。「それは、名案です。菅原先輩は、野球部です。野球部に顔を出しているかもしれません」

伊達は、どのあたりまで来たか確認した。「今、どのあたりだ?」ルームミラーを覗き込んだ大野巡査は、笑顔で返事した。「もうすぐ、178に入ります。そしたら、10分ぐらいです」話し込んでたせいか、時間が短く感じた。泊めてもらうことになったため、お土産をどれにしようか、確認した。大野巡査へのお土産のほかにもう一つ加えることにした。博多通りもんとひよこ饅頭にすることにした。対馬に一年あまりいた伊達は、山並みの風景を眺めていると故郷に戻ってきたような気分になった。「なんだか、里帰りしたような気になるな～。やはり、対馬は、いいとこだ」大野巡査は、嬉しそうに返事した。「そう、言っていただけで嬉しいです。いつでも、遊びにいらしてください。伊達さんは、僕たちの縁結びの神様ですから」

伊達が、瑞恵と大野巡査の出会いを作ったのは仕事のためだったが、偶然にも二人を結ぶ結果となった。今では、縁結びの神様とまで言われてしまった。それにもかかわらず、また、瑞恵を捜査に利用してしまったことに後ろめたさを感じた。「そこまで言われると、照れるな～。大野君は、ついてるな～。美人と結婚できて。瑞恵さん、豊玉姫の化身かもしれんぞ」大野巡査は、苦笑いした。「え、だったら、竜宮城に帰るかもしれませんね。それは、困りますよ。一生、僕のそばにいてもらわないと」伊達は、ほめるつもりだったが、たとえば悪かったことに気まづくなった。「いや、そういうことじゃなくて、瑞恵さんは、チョ～～美人だって言いたかったんだ」大野巡査は、ワハハ～と笑い声をあげた。「今のは、冗談です。伊達さんには、本当に、感謝しています」

ソリオは、右手の上対馬高校を通り過ぎ、左手の消防署の少し先から右に折れた。明るい声で伊達に声をかけた。「着きました」伊達は、まだ、新築に見える大きな和風建築の家に目を丸くした。「立派な家だな～。大野君は、金持ちのボンボンなんだな～」ボンボンと言われ、ハハハと笑い声をあげた。「ボンボンじゃありませんよ。貧乏な漁師のせがれです。でも、おじいちゃんが残してくれた土地が、奇跡的に高値で売れたんです。両親もびっくりしてました。購入したのは、中国人らしいんですが、別に、気にはしてません。先に降りてください。車庫に入れてきますから」お土産を手にして降りた伊達は、和風庭園を眺めながら大野巡査を待った。

車庫から駆けてやってきた大野巡查と伊達は、玄関に向かった。扉を開けた大野巡查は、大きな声で叫んだ。「ただいま～～。帰ったよ。お客さんだ」パタパタとスリッパの音が近づいてきた。目を丸くした母親は、上がり框に正座して挨拶した。「ようこそ、お越しくございました。どうぞ、おあがりください」大野巡查は、伊達をリビングに案内した。リビングのソファに腰掛けしばらくすると父親が現れた。正面に腰掛けた父親は、満面の笑みで挨拶した。「この度は、縁を取り持っていただき、誠にありがとうございます。今日は、お泊りいただけるそうで。いや、一日と言わず、何日でもどうぞ。田舎料理ですが、魚は、新鮮ですから」

伊達は、あまりにも大げさな歓迎に恐縮してしまった。「いや、そう、気を使っていたいては、恐縮します。今回は、出張です。今日だけでも、泊めていただけるなんて、幸運です。つまらないものですが、どうぞ」伊達は、お土産を差し出した。父親は、またもや、目を丸くして大げさな喜びを見せた。「これはこれは。ありがたく頂戴いたします。博多通りもん、ひよこ饅頭、有名な博多の名物。早速いただきましょう」母親が、お茶を運んできた。母親は、お土産を引き取ると席を外した。しばらくして、通りもんを入れた器を運んできた。母親が横に腰掛けると父親が、縁談のお礼を述べた。「この度は、英雄にはもったいないようないい方をご紹介いただき、誠に、お礼申し上げます。英雄は、まだまだ、駆け出しの警察官です。今後とも、よろしく願いいたします」

伊達は、ここまで感謝されると気まずくなってしまった。「いや、ちょっとしたきっかけを作っただけですから。お二人は、赤い糸で結ばれていたんですよ。英雄君は、イケメンだし、瑞恵さんは、美人だし、お似合いじゃないですか。本当に、ご婚約、おめでとうございます」母親もお礼を述べた。「本当に、ありがとうございます。瑞恵さんのお兄さんは、正義感の強い立派な警察官でした。それに、英雄の目標でもありました。御指導もしていただきました。本当に、立派な方でした。お兄さんのためにも、瑞恵さんを幸せにするんだよ。英雄」突然、振られた英雄は、目を丸くしてうなずいた。「そんなこと言われなくても、わかってるさ。必ず、幸せにする」頼もしい大野巡查を見つめ、伊達は笑顔を作った。

伊達の脳裏に、ふと、背番号1のユニフォームを着た菅原洋次の姿が浮かんだ。彼について、父親に聞いてみることにした。「話はわかりますが、上対馬高校の卒業生の菅原洋次さんをご存知ですか?彼も、野球部だったんですが」父親は、首をかしげて思い出しているようだった。「すがわら」とつぶやき、思い出したような表情を作った。母親も思い出したように夫に声をかけた。「例の」父親は、うなずいた。伊達は、意味ありげな”例の”という言葉が気にかかった。伊達は、即座に尋ねた。「菅原洋次のことをご存知なんですか?」両親は、小さくうなずいた。父親が、つぶやいた。「確かに、菅原という学生が、いました。もう、あれから、20年たつかな〜。かわいそうな事件でした」母親が、横から口を出した。「もう、忘れてあげないと」

伊達は、菅原洋次の過去の話を知った。「是非、お聞かせ願いませんか?決して、ご迷惑はおかけいたしません。実は、彼には、搜索願届が出されているんです。7月から行方つかめないんです。お願いします」二人は、顔を見合わせてうなずいた。父親が、眉を八の字にして、静かに話し始めた。「あくまでも、昔の話です。お役に立つかどうか、英雄が小学校に入る前の話ですから、かれこれ、20年は経つと思います。菅原君は、剛腕投手ということで、この辺りでは、知らない者はいませんでした。プロ野球にスカウトされるんじゃないかと騒いでいたものです。ところが、悲しい事件が起きました。彼は、本当に、正義感あふれる好青年です。菅原君は、悪くない」

目頭を押さえた父親は、言葉に詰まった。これ以上話すのをためらっている様子だった。大野巡查が、口をはさんだ。「昔のことじゃないか、どんなことがあつても、もう、許されるんじゃないか。俺も知りたい」父親は、涙声で話し始めた。「傷害事件を起こしたんだ。相手が、悪かった。殴った相手というのが、チンピラだ。殴られた相手は、入院したらしい。そして、チンピラの仲間が、学校までやってきて、損害賠償を請求してきたそう。そのことで、菅原君は、退学してしまった。プロ野球選手の夢も、消えてしまった。本当にかわいそうだった」大野巡查が、叫んだ。「きっと、正当防衛だ。チンピラに絡まれたに違いない。クリスチャンが、何の理由もなく、人を殴るはずがない」

父親は、うなずき話を続けた。「本当のことは、警察も、学校も、だれも、わからない。でも、チンピラと事件を起こしてしまったことは事実だろう。本当に、かわいそう。あんなことがなければ、プロ野球に入っていたかもしれない。残念で、仕方ない」伊達は、菅原洋次がチンピラになったいきさつを知ったような気がした。彼は、いつか、ヤクザに復讐するために、自らチンピラになったのかもしれない。麻薬取引の現金持ち逃げは、その時の仕返しか?「お父さん、胸の内を話してくださり、ありがとうございます。私も、菅原洋次を信じています。今も、正義を貫いていることでしょう。ただ、正義が、勇み足にならなければと」

顔を真っ赤にした大野巡査は、事件に対する警察の対応について疑問を抱いた。「警察は、真剣に事件を調べたのだろうか?その時、菅原先輩は、警察に不信感を抱いたんじゃないですか?もしそうだったら、警察を恨んでいるかもしれませぬね」伊達は、小さくうなずいた。自分に関する傷害事件、後輩の事故死、もし、これらに警察の不正がからんでいたならば、正義感の強い菅原洋次は、どう出るか?早まったことをしでかさなければいいが。菅原洋次の過去を聞いた今、ますます、対馬北署が、彼の失踪にかかわっているように思えた。また、学校に恨みを持つとは考えられないから、もし、対馬にやってきたとしたならば、学校に立ち寄ったのではないかと思えた。

母親が、突然、甲高い声で話し始めた。「今日は、腕を振るわなくっちゃ。縁結びの神様の歓迎会ですから。伊達さんは、いけるほうでしょ。麦のやまねこ、白嶽(しらたけ)、どぶろく、好きなのをどうぞ。倒れるまで、飲んでください」伊達は、一瞬、笑顔を作ったが、遠慮がちに返事した。「飲める方ですが、明日がありますから。やまねこを少々いただきます。ほんと、そう、気を使わないでください」母親が、叫ぶように言った。「何をおっしゃいます。伊達さんあっての、英雄です。英雄、しっかりお酌するんですよ」あまりにもおおげさな母親に恥ずかしくなったのか、頭をかきながら、返事した。「わかってるってば、伊達さん目指して、頑張るさ。お腹、すいてきたな〜」母親は、料理の準備に取り掛かった。

サンタクロース

12月8日（火）伊達は、北署に到着するとお土産を手にして署長室に向かった。挨拶を終えた伊達は、大野巡査の案内で上対馬高校に向かった。上対馬高校は、思っていた以上に大きかった。大野巡査は、職員室で校長との面会を取り付けてきた。校長室に案内された二人は、柔和な表情の校長の歓迎を受けた。伊達は、早速、用件を切り出した。「お忙しいところ、突然、押しかけまして申し訳ありません。単刀直入に申し上げますと、卒業生でいらっしゃる菅原洋次さんが、7月から、行方不明になっておりまして、そういうわけで、対馬まで捜索に参った次第です。最近、こちらに立ち寄ったということは、ございませんか?」

校長は、首をかしげたが、卒業生からのプレゼントの件を話し始めた。「いえ、そういう方は、お見えになっていません。参考になるかどうか、わかりませんが。先日、卒業生のサンタクロースという方から、野球部に野球用具のプレゼントが宅急便で届けられました。その送り主が、だれなのか、心当たりがないのです」伊達は、菅原洋次が野球部であったことから、送り主は、菅原洋次ではないかと直感した。「送り主の住所は、わかりますか?」校長は、首をかしげて返事した。「それが、変なんです。東京都杉並区の住所になっていましたから、確認してみますと、そこはカトリック教会なんです。教会に尋ねましたところ、心当たりがないということなんです」

所在がばれないように教会の住所を利用したものと考えられた。「このようなサンタクロースからの野球用具のプレゼンが、これまでにございましたか?」校長は、即座に顔を振った。「いいえ、初めてです。金額にすれば、かなりの額になります。御礼を申し上げたいのですが、どなたからなのかわかりませんので、困っております。警察の方に探していただければ、助かりますが」安易に引き受けるわけにはいかなかったが、送り主が菅原洋次である可能性を考えると、このプレゼントが、捜索の手掛かりになるような直感がした。「わかりました。そのプレゼントは、どちらの取次店から送られてますか?」校長は、しばらくお待ちくださいと言い残して、席を立った。

校長室に戻ってきた校長は、メモを伊達に手渡した。「こちらです」メモには、杉並区、ヤマト運輸高円寺南センター、と記されてあった。伊達は、うなずき返事した。「とりあえず、菅原洋次の顔写真をもとに、こちらのセンターに確認してみます。しかし、送り主を特定できるかどうかは？ 菅原洋次は、変装している可能性があります。私たちとしては、一刻も早く、探し出したのですが、搜索の手掛かりがございません。また、何か、不自然なことがございましたら、警察にご連絡いただけますか」校長は、うなずいて質問した。「菅原洋次さんは、何か、事件に巻き込まれたということでしょうか？」伊達は、小さな声で返事した。「いえ、まだよくわかりません。奥様から、搜索願届が出されていて、現在、搜索している次第です」

伊達と大野巡査は、学校を後にすると北署に向かった。北署に到着すると署長に呼ばれた。署長室に入ると異様な笑顔でねぎらいの言葉を受けた。「お疲れでしょ。大野巡査は、役に立っておりますか？佐藤警部の搜索は、当方で手を尽くしております。福岡県警の手を煩わせるほどのことではありません。ごゆっくりなさってください」伊達は、保養所にやってきたのではあるまいし、全く、訳の分からんことを言うものだと内心思ったが、今後の捜査を話すことにした。「佐藤警部の失踪は、警察全体の問題です。一刻も早く、身の安全を確認しなければ、警察の威信にかかわります。本部長の命令でありますので、私は、しばらく搜索に協力させていただきます」

本部長と聞いた署長は、顔が固まった。「それは、ご苦労様です。是非、ご協力をお願いします。大野巡査は、自由にお使いください。また、必要なことがございましたら、何なりとおっしゃってください。ところで、上対馬高校に行かれたということですが、何か？」伊達は、詳しいことは伏せることにしたが、菅原洋次の失踪について、話しておくことにした。「菅原洋次という男性が行方不明ということで、10月に、妻より、搜索願届が出されました。彼の出身校が上対馬高校とわかり、何か、手掛かりはないものかと

伺ってみました。それと、佐藤警部の失踪と彼の失踪に、何らか関連がないかとも考えた次第です」

23

目を丸くした署長は、身を乗り出して尋ねた。「何か、関連がありましたか？」伊達は、元気がない声で返事した。「いえ、今のところありません。あくまでも、私の直感ですが、何か、つながっているような気がしてならないのです。これはいけない、刑事は、足です。思い込みは禁物です。こんなことを言っている場合ではありません。早速、私なりに、聞き込みをやってみます」署長は、身をただし、言葉をかけた。「私どもも、全力を挙げて、捜索いたします。ご協力、よろしく頼みます」署長室を出た伊達は、大野巡査に運転を頼み、交通係が使う小型車のスイフトに乗り込んだ。伊達は、サンタクロースのプレゼントが頭から離れなかった。ふと、プレゼンとは、ほかにも送られているのではないかと思えた。

後部座席で腕組みをした伊達は、大野巡査に声をかけた。「サンタクロースのプレゼンとなんだが、高校以外にも送られているんじゃないだろうか？」大野巡査は、うなずいた。「それは、考えられますね。ほかに送るとなれば、もしや、出口家ということは、考えられませんか？行ってみますか？」伊達もそのように考えていた。「出口巡査長のお母さんは、どちらにお住まいなんだ？知ってるか？」大野巡査は、即座に返事した。「確か、瑞恵さんと一緒のマンションだったと思います。住所はわかります。今から、行ってみますか？そうか、仕事かもしれませんね。お母さんは、老人ホームにお勤めです。そちらに行ってみましょうか？」伊達は、職場に行けば出会えるような気がした。「職場に行ってくれ」

スイフトは、385号線を北上し、佐須奈局を左折してさらに北上した。10分ほどすると老人ホームに到着した。大野巡査は、伊達に声をかけた。「私が確認してまいります。しばらくお待ちください」大野巡査は、老人ホームの玄関に向かってかけて行った。し

しばらくすると大野巡査が、戻ってきた。「いらっしやいました。少しだったら、お話しできるそうです」二人は、老人ホームに向かった。早速、カウンターで呼び出してもらった。しばらくすると出口巡査長のお母さんがやってきた。彼女が、二人に声をかけた。「何か?5分ぐらいだったら、構いませんが」

24

伊達は、手短かに話すことにした。「お忙しいところ、申し訳ありません。私は、福岡県警からやってきました伊達と申します。すぐに終わります。簡単な質問をさせていただきます。最近、サンタクロースと名乗るものから、何かプレゼントをお受け取りになられませんでしたか?」目を丸くした彼女は、驚いたような表情で、返事した。「昨日、受け取りました。たくさんの食料品が送られてきました。それと一緒に小さなメモも入ってました。」出口巡査長にお世話になったサンタクロースです。些少ですが、お受け取りください。」と書いてありました。サンタクロース、ご存知なんですか? かなりの量なので警察に届けようと思っていたところなんです。気味が悪くって」

伊達は、うなずき返事した。「サンタクロースのプレゼントは、上対馬高校にも送られていました。彼は、卒業生です。だから、善良な人物とみていいでしょう。そちらのプレゼントは、受け取られて、構わないと思います。ところで、それは、どこから送られてきましたか?東京ですか?」彼女は、首をかしげて思い出した。一つうなずくと返事した。「ヤマト運輸、京都太秦でした。家に帰れば、住所はわかります」伊達は、うなずいた。「京都ですか。いえ、これで結構です。送り主の住所は、教会でしょう。サンタクロースは、クリスチャンなのです。彼は、コロナ禍で苦しんでいる人たちを憐れんで、プレゼントを配っているのです。今も、トナカイに惹かれて、日本中を飛び回っていることでしょう。素直に、サンタクロースに感謝しましょう」

彼女は、おとぎ話をマジにする警察官に笑顔を作った。「そうですか。サンタクロース

はクリスチャンですか。親切な方なんですね。それじゃ、ありがたくいただいております。伊達さんは、サンタクロースを探しておられるんですか？」サンタクロースは、善人といった手前、搜索願届が出ているとは、言いにくくなってしまった。「いや、国民を代表して、お礼を言いたくて、探しているんです。でも、どこにいらっしゃるのか、わからないもので、困っています」彼女は、提案した。「そうでしたか。サンタクロースは、クリスチャンでしょ。そうだったら、教会を探されたらどうです。疲れた時は、教会で休憩されてるかもしれませんよ」

25

伊達は、彼女のアドバイスにうなずき返事した。「そうですね。でも、サンタクロースは、お礼など、望んでいないかもしれませんね。警察が出しゃばるのは、ヤボってもんですかね。お忙しいところ、お時間取らせました。それでは、失礼します」二人は老人ホームを出発すると昼食をとるために北署近くのそば道場に向かった。伊達は、静かにサンタクロースのことを考えていた。もし、サンタクロースが、菅原洋次であれば、彼は、正義を貫き通しているとみていい。ということは、佐藤警部の失踪とは、関係ないと考えられる。ならば、佐藤警部の失踪は、ヤクザによるものか？奴らに拉致軟禁されているのか？すでに消されているのか？

拉致軟禁されているとすれば、例の別荘ではなかろうか？すでに、消されているとして、遺体が見つかっていないことから考えて、山中に埋められたのか？海底に沈められたのか？それとも、海外に連れ去られたのか？もう一度、原点に立ち戻って考えてみよう。そもそも、佐藤警部がヤクザの麻薬密輸に加担していたとして、佐藤警部を始末する必要があるのか？何度も、ヤクザの麻薬密輸に手を貸していたのならば、佐藤警部を始末する必要はないのではないか？これからも、佐藤警部を利用すればいいのではないか。万が一のことを考えて、消すことにしたのか？

安倍警部補の発狂は、どう考えればいいのか？佐藤警部の失踪と安倍警部補の発狂は、

それぞれ別々の事件として考えるべきなのかもしれない。佐藤警部の失踪は、ヤクザによるもので、安倍警部補の発狂は、菅原洋次によるものと考えてみてはどうか?菅原洋次がサンタクロースだと仮定して、安倍警部補が出口巡査長の自殺に関与していたならば、決して、菅原洋次は、安倍警部補を許さないはず。そう考えれば、サンタクロースが、安倍警部補に殺人予告のプレゼントを贈った可能性は十分ある? なんとなく、そう考えたほうが、自然なような気がする。菅原洋次は、クリスチャンだ。恫喝をやっても、軟禁や殺人まで犯すとは思えない。現に、サンタクロースとなって、人助けのプレゼントをしている。菅原洋次の良心を信じよう。目下の問題は、佐藤警部の失踪だ。

26

考え込んだ伊達をルームミラーから覗いていた大野巡査は、小さな声で遠慮がちに声をかけた。「サンタクロースは、間違いなく、菅原先輩ですね。でも、堂々と名を名乗らないところを見ると何かヤバいことをやったということですよ。ヤッパ、ヤクザの金を持ち逃げしたんですかね。その金でプレゼントしてるってことですか? まさに、ねずみ小僧みたいですね」伊達は、うなずき返事した。「そうあってほしくないが、おそらく、そんなところだろう。バカなヤツだ。一生、サンタクロースとして、逃げ回る羽目になる。奴らにつかまれば、拷問を受けて、消されてしまう。みじめな人生を選んだものだ。我々が、奴らに消される前に、身柄を確保してやりたいが、全く手だてがない。どうすればいいんだ?」

大野巡査が、応答した。「自首することはありませんか?僕は、菅原先輩を信じたいです。菅原先輩が本当の悪人になってしまうとは、考えられないんです。現に、プレゼントをしてるじゃないですか。神に懺悔し、法に従って、罪を償うと信じています」伊達は、「そうだな」とつぶやいた。考えれば考えるほど、菅原洋次が、かわいそうになってしまった。プロ野球選手を夢見ていた好青年が、些細な事件をきっかけに高校を退学し、拳銃の果てにヤクザになってしまった。そして、ヤクザを裏切り、今では、ヤクザに追われる身となってしまった。こんなに悲しい人生があってもいいものだろうか。神が本当

にいるのら、彼を助けてあげてほしい。俺に、何ができるというのだ。

大野巡査は、麻薬取引のお金を持ち逃げする二人組のシーンを想像していた。菅原先輩は、相棒を助手席に乗せて、白のアルファードを運転している。204号線を呼子方面に走っている。後部座席には、現金が入ったアタッシュケースを挟んで佐藤警部とヤクザが腰掛けている。目的地が間近なのか、安心した表情を見せてる。運転に疲れた菅原先輩は、路肩に車を停めた。そして、コーヒーを飲み始めた。相棒は、「どうぞ」と言って後部座席の二人に、コーヒーを差し出した。二人は、笑顔でカップを受け取り、グイグイとコーヒーを飲んでいる。再び、車は動きだした。そして、しばらくすると、後部座席の二人は眠ってしまった。相棒は、眠りを確認すると、「いいぞ」と菅原先輩に声をかけた。車は、山手に向かって走り出した。人気のない林道に黒のアスリートが止まっている。その後ろにアルファードは、停車した。菅原先輩と相棒は、素早くアタッシュケースを手にとるとアスリートに運び込んだ。アスリートは、林道を下って消えた。

27

このシーンが、事実ならば、へまをした佐藤警部とそのヤクザは、責任を取らされる。つまり、消される。こう考えれば、佐藤警部は、この世にはいないということになる。遺体は、地中か?海底か?大野巡査は、顔をブルブルと振った。嫌なイメージを頭から追い出したかった。野球部の先輩が、悪事を働いたとは、思いたくなかった。今のところ、何も、解明されていない。勝手な、妄想でしかない。何も悪い方向に考える必要はない。佐藤警部は、心をリセットするために、修行の旅に出たのかもしれない。菅原先輩は、宝くじに当たって、しばらくお城巡りの旅に出たのかもしれない。何も、心配する必要はないのかも知れない。警察官は、いつも、悪い方向に考える。よくない職業病だ。

ソリオは、そば道場の駐車場に停車した。「着きました」疲れた表情の伊達は、車から降りると大きく背伸びした。「いい天気だな～～。サンタクロースよ、俺にも何かくれ～～」伊達は、青空に向かって叫ぶと、ワハハと笑い声をあげた。大野巡査もハハハと笑い声をあげた。二人が店内を覗くとお客は、3人だけだった。コロナ禍のせいで、観光客の客足が遠のいたに違いなかった。窓際のテーブルに着いた二人は、お品書きを手にした。伊達が、つぶやいた。「スペシャルそば、にするか。俺のおごりだ。好きなの、食べていいぞ」大野巡査は、笑顔で返事した。「それじゃ、お言葉に甘えて、私も、スペシャ

ルそば、お願いします」

閑散とした店内を眺め、伊達がか細い声で話し始めた。「このままじゃ、客商売は、お先、真っ暗だな。どうにか、ならないのか？ ガ～ス～よ」大野巡査は、うなずき応答した。「春日大明神は、なにやってんですかね。昼寝でも、してるんですかね」伊達は、窓の外に広がる青空を眺め返事した。「どんなに立派な人でも、悪いことをする。なぜなんだ。そんなに、お金や、権力が欲しいのか？俺は、凡人でよかった。偉くなりたい、金持ちになりたい、と思ったこともあったが、今は、全く思わない。もし、人は生まれ変わるとしても、何も考えないそこいらの小石でいい。生きてると、なんだか、さみしい」大野巡査は、うなずき返事した。「今度生まれるときは、神様に生まれ変わりたいです。そして、すべてを幸せにしたいです」伊達は、即座に返事した。「お前は、大物になれるよ」目じりを下げた二人は、クスクスと響きを抑えるような笑い声で肩を震わせた。

死神サークルⅢ

著 春日信彦

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
